



第27号

2014年 3月1日

○発行  
650-0004  
神戸市中央区中山手通  
7丁目25-38  
神戸真生塾広報誌編集係  
TEL (078) 341-5897  
FAX (078) 341-8239  
E-mail: kouhou@kbsinsei-j.org

○振替口座  
郵便振替01100-8-18680

# 神戸真生塾の昨日・今日・明日を想う

神戸真生塾特別顧問

神奈川県立保健福祉大学名誉学長  
社会福祉法人横須賀基督教社会館会長

阿部 志郎



インドのムンバイの空港から、ガラスの窓の閉まらない粗末なタクシーで中心街に向かう。まだボンベイと呼ばれていた二十五年前のこと。

街まで約三十分の道のりで、荒涼とした野原が続く。車の中に悪臭がただよっているので、外に目をやると古ぼけたテントが立ち並ぶ。難民の村だと運転手が言うので、さてはテントの臭いかと納得する。

翌朝、その難民の村に案内された。テントではなく人々の生活の臭いだっただけに気付く。数千の難民の人々が住みつくテントの群の一隅で、泥だらけになった男の子の体を洗う母親に出会う。難民の人々が難民らしいのは水だという。砂地で井戸もない。飲み水を求めて頭の上に桶をのせ四十度の酷暑の中を砂漠のような荒地を往復三十分歩かねばならないらしい。その大事な水を、母親が惜し気もなく桶から汲み出して男の子の体を洗い流している姿を美しいと

思った。  
なにか日本が失った母子像がそこにあるのではないか？

『五体不満足』の乙武洋匡君が生まれた時、手足のない我が子に狂乱するといけないとしばらく母親に会わせなかった。ようやく母親が赤ちゃんと会う日がきた。卒倒するかもしれないと心配した病院はわざわざ母親のためにベッドまで用意した。

初めて赤ちゃんで障子児の洋匡君をのぞきこんだ母親が「まあ、かわいい」と喜びの声を上げる。これが母親ではないか。この限らない親の愛情を受けて洋匡君は立派に育った。母が注ぐ愛情を身に受けた子は必ずや愛する人になるに違いない。洋匡君は現在東京都の教育委員の要職を務めている。

しかし世の中には、何らかの理由で親の愛に浴することができなかつた子がいる。その子が乳児院・養護施設を利用することになる。愛に満たされなかつた子をどうしたらよいのか。

第一に施設の職員が精一杯この子を愛すること。けれど他人の職員で

は親と同じようには出来ないだろう。

そこでプロフェッショナルである職員が、専門の知識と技術を活かして経験を積み愛情を込めること。ケアは「愛」という原意だから、なぜ子どもをケアするのかと問われるならば「愛するから」という答えしかない。保育士・栄養士・看護師の名称は母親の子への「授乳」に由来する。母親の子に対する慈愛が専門職のモデルであることを覚えておきたい。

第二に住民が親に代わって一人の市民として子どもを愛し責任を果たすこと。このような社会を市民社会と呼ぶ。

第三にこの子らを地域の皆で守ること。町内会・民生児童委員会を中心に、インフォーマル・システムが出来ないものか。

第四に児童相談所・福祉事務所等自治体の行政がこれを支援すること。アジアのタイ国に不登校の子はいない。(日本は十二万七千人)それはしっかり子どもを育てている親を親族が取り囲んで協力し、それを地域の人々が力をあわせて守っている。

その上に人々の中に仏教の教えが深く根付いているからだと思生省の調査団が報告している。

帝国ホテルのフランス料理が専門で二百名のコックを指揮する総料理長がテレビで「一番おいしい料理は何ですか」の質問に「お袋の味です」と答えた。「お袋の味」を条件に恵まれない子ども達にまで伝えるのに、私達の国で、いや神戸市ではどうしたらよいか。これが施設が地域住民がボランティアが、そして自治体が自問を続けるべき課題なのではないか。

最近、国の方針として「社会的養護」が重視されている。小規模な家庭的施設、養護施設(真生塾はそのひとつ)と、里親の三者が連携して子ども達を協働して育てるのを目標に里親の普及に力を入れている。

是非、里親が増えてほしいし、そのため行政が普及、相談、受入、指導・助言を強化することが期待されるが、日本の「家」の伝統、血縁関係の慣習が壁になりなかなか発展できそうにない。

家族に拒否され、地域で置き去られた子どもの殆どを全国の五八九の養護施設が引受け、その数三万名に及ぶ。里親は、九%を占めるに過ぎない。米国は七六%、オーストラリアは九四%の子が里親の下で暮らしているのに。

里親の普及には、まだまだ時間を



要するだろう。

社会的養護の名目で、児童養護施設の必要性が減るわけではない。逆に、児童養護施設や乳児院が専門施設として果たす役割はますます重くなる、といえよう。

さて、神戸真生塾は、法律の規定によって行政が義務的に設置した施設ではない。

制度のない時代に、キリストの愛に目ざめた人々が、やむにやまれない思いに迫られて始められた施設で、枠を越えて進んでる愛のエネルギから生まれた施設にほかならない。

この「愛」が一二四年にわたって受け継がれてきたのは、神の摂理というべきだろう。そのために努めてきた献身的な職員の働きも忘れてはいけない。

明治三七、八年の東北の大凶作の折、約二万名の子どもの行方が分かっていない。真生塾は福島から救助された八二名の子ども達を受け入れることになった。

子ども達が駅に着いた時、真生塾の二〇数名の子ども、職員達とともに三〇数名の神戸教会員が並び、救世軍の演奏により、東北の子ども達を

歓迎している。

そして、真生塾に毎月米を届けた人が一四九名、献金した人が二六、三四七名と記録されている。貴重な歴史である。昔から、教会と地域に支えられ、人々が施設に参加して子ども達を守ってきたとは、なんと感謝すべきことであるう。

長く尊い歴史を綴ってきた神戸真生塾には、人々の祈りと実践、そして豊かな経験の蓄積とがある。

さらに、子ども達との充実した生活共同体をつくり、与えられた使命を全うするのを祈りとしよう。

歴史とは、過去と現在と対話である、と歴史家がいう。

言葉では言いつくせない過去の苦難と光栄の歩みに学び、それを踏まえて、未来への夢を描きながら、「いま」、「ここで」できる限りの力を盡したいと思う。



### 《保育所 真生きりぎりす保育園》

**希望はわたしたちを  
欺くことはありません**

見せ合う機会がありました。初めて見た幼稚園の年長児が演じた劇を三歳児のぶどうぐみの子どもたちが静かに、そして真剣な眼差しで観劇している姿に成長を感じました。続いて、四歳児りんごぐみ・五歳児めろんぐみの演じた「一〇〇かいだてのいえ」では、劇の中で繰り返される振り付けをぶどうぐみの子どもたちが観客席で一生懸命に応援するように真似している姿も微笑ましかったです。稚園の子どもたちもそれぞれ席で同じように振り付けを真似し始めました。舞台と観客席が一体となって劇を盛り上げていきました。保育園の子どもたちの楽しそうに演じる姿に触発されたようです。生活発表会の当日では保護者の皆さまのご協力もあり、いろいろな場面で観客席と一体感を感じたのですが、子どもたちは誰に勧められることなく自然とそのような一体感を生み出していました。まさに、『神の国』を見せてもらったような交流会となりました。さて、今月の聖句は『希望

聖書物語の中には『子どもたちをわたしのところに来させなさい。妨げてはならない。神の国はこのような者たちのものである。』（マルコによる福音書一〇章一四節）とイエスが子どもたちを祝福する場面が描かれています。イエスが生きていた時代、労働力とならない子どもたちは大切にされていませんでした。その様な時代背景のため、イエスの側に近づいてくる子どもたちを弟子たちがイエスを気遣い、近づかないように追い払おうとした行為は当然の事でした。しかし、イエスは「妨げてはならない。」と弟子たちを叱りつけ、子どもたちを抱き上げて、祝福したと描かれています。そして、『子どものように神の国を受け入れる人でなければ、決してそこに入ることはできない。』と語っています。

先日、清風幼稚園との交流会で両園の子どもたちがお互いの生活発表会で演じた劇を

はわたしたちを欺（あざむ）くことはありません。』です。いつもお伝えしていますように子どもたちは保護者の皆さまにとっても我々職員にとっても『希望の光』であります。日本の社会では九〇年代より誰にも希望が与えられる時代ではなくなったと言われています。東日本大震災の後、『絆』という言葉が見直されましたが、なかなか絆を結ぶことが難しかったり、格差が広がって行ったり、夢を描いたり語ったりすること、努力が報われないこともあり、なかなか希望を見出せない時代となっております。しかし、目の前に居る子どもたちに何を残せるのかと考えた時に我々大人が一日一日を大切に生きていくことで少しでも良い環境を提供できるのではないかと思います。希望は苦しい状況の中でこそ思い描くことができます。春を迎え子どもたちが新しい世界へと飛び出していく時期となりました。今月も保護者の皆さまと“子どもたちの最善の利益”を共に考えていきながら子どもたちの育ちを支えていけたらと願います。

(上杉 徹)



《児童養護 神戸真生塾》

クリスマス祝会



本年度もイエスキリストのご誕生をお祝いする祝会に、沢山のお客様にお越し頂き、ともにクリスマスのひと時をお祝いできましたことを心より感謝しております。本年度も子ども達とこの日の為に沢山の練習を重ねてきました。祝会で毎年行われる聖誕劇では、台詞合わせに始まり、部分練習、全体練習、舞台練習と段階を追うことに難しくなっていました。それに加え、本年度は納涼大会で行われた催し物のダンスでお世話になっ

たHIPHOPグループ「chi:ldren story」の皆様が、祝会で子ども達のダンス・歌・ラップを披露しましたよと言っ

て下さいました。2ヶ月前から子ども達はダンスの練習を始めましたが、始めは上手く踊れなかったり、ダンスの順番を覚えられず困惑していた場面が多く見られましたが、ダンスを続けていくうちにダンスに一体感が生まれ、上達していく様子が目に見えてわかるようになってきました。聖誕劇に加え、ダンスも披露するということで子ども達のスケジュールもかなりハードになり、時には練習が嫌になっってしまうこともありましたが、しかし、子ども達はそんな逆境にも負けず職員達と切磋琢磨しながら練習することができました。そして迎えた本番当日。いつも練習をしているホールには沢山のお客様が席に座っており、いつもと違う雰囲気、子ども達の緊張も高まりつつあるようでした。聖誕劇では日頃の練習よりも大きな声で堂々とした姿に感動と驚きを与えられました。頑張った練習を続けたダンスでは皆、お

揃いのバンドナを腕や首など好きなところに巻きつけて参加をしました。そしてダンスが始まるとお客さんも子ども達のダンスの完成度に驚いており「おおー！」といった歓声も聞こえてきました。最後は有志の子ども達で歌う「世界に一つだけの花」です。練習の時は幼児や小学生、数名の中学生だけで座っていたが、高校生数名が周りの中高生を誘い、ステージに上がってきました。率先してステージに上がるうと声をかけてくれたのは今年度で神戸真生塾を退所する子ども達でした。最後の神戸真生塾でのクリスマスだからと周りに声をかけてくれたようです。そして全員で「世界に一つだけの花」を歌い、感動のラストを迎えることができました。子ども達の表情を見ると、どの子も穏やかな顔をしていました。この祝会を通じて子ども達は達成感や充実感を手に入れることができたのではないのでしょうか。会場にお越し頂きました沢山のお客様、本当にありがとうございました。来年度も皆様と素晴らしいクリスマスを迎えられますように (安西)

クリスマス食事会

毎年十二月二十四日の夜は子どもたちが楽しみにしているクリスマス食事会が行われます。

今年も食事会の一ヶ月前に子ども会のメンバーが集まり、クリスマスの特別メニューの候補を考え、アンケートを作成し、アンケート結果を元に子ども達で話し合っってメニューを決めました。

今回のメニューは、骨付き鶏のから揚げ、フライドポテト、ハンバーグ、サラダ、ピザ、わかめスープ、おにぎりでした。厨房のお姉さんの豪華な手料理に子どもたちも大喜びでした。

食事は子ども会の5つのグループに分かれ各部屋で過ごします。いつもは別の部屋で過ごしている幼児の子どもや中高生と一緒に食卓を囲むと普段に増して賑やかになりました。年下の子どもたちの面倒を見たり、年少時達が高生に甘えたりする姿も見ら



れました。食事中はサンタさんに何をもらうかを言い合ったり、好きなアーティストの話等で楽しい話題は尽きませんでした。食後にクリスマスケーキとシャンメリーで乾杯をし、各自持ち寄ったトランプなどを楽しみながらクリスマスのひと時を過ごしました。二時間ほどの楽しい食事会はあつという間に過ぎましたが、子どもたち職員にとっても濃い時間になりました。子ども会は子ども会のメンバーを中心に外出やクリン作戦などの様々な行事を計画しています。私達職員も子ども達と協力しながら今後子ども会の行事を盛り上げて行きたいと思えます。(中本)



# カネディアンアカデミーとの交流について

例年神戸真生塾の子どもたちとの交流を行ってくださっている、カネディアンアカデミースクールとの交流についてご報告いたします。

カネディアンアカデミースクールの学生さんとの交流は、年に三〜五回程行っています。神戸真生塾に学生さんが訪問して下さり、一緒に遊ぶ機会もありますが、カネディアンアカデミースクールに遊びに行かせていただく機会も設けていただいています。

子どもたちはカネディアンアカデミーのお兄さんお姉さんのことが大好きで名前も覚えていたりしています。会う前は楽しみにしていても、実際に会うと照れたり恥ずかしそうにしていますが、遊んでいると楽しさからか、いつの間にか名前で呼び合うようになっていきます。



交流の方法はいつも同じではありません。

神戸真生塾に訪問して下さった際には、小学生・幼児を中心に体育館や中庭での外遊びをして下さいます。子どもの要望に答え、定番の遊びであるボール遊びや、鬼ごっこ、泥警、縄跳びなどに一緒に遊んで下さいます。また、カネディアンアカデミースクールの方から持参して下さった、道具での遊びも提案して下さいます。

その為子どもたちは普段、神戸真生塾で遊ぶ事の出来ないような遊びにも触れられます。巨大なパラバルーンや、フープ、他にも子ども達が始めて触れるような海外の玩具等も、沢山用意して下さいます。普段では出来ないような遊びなので、子ども達も大喜びで遊んでいます。

生徒の皆さんは大人教で対応して下さるので、子どもたちはほぼ個別の関わりでゆつくりと時間を過ごさせてもらっています。また全員でゲームをする機会があります、体を動かす時間もあるので、いつも以上の大人教での関わりも経験させて頂いています。

ここ数年、恒例の交流行事になりつつあるのはハイキングです。ハイキングに参加するのは、小学生以上の子ども達です。今年度は



二回ハイキングを開催しました。普段は中々歩かない子ども達ですが、このときはかなり違います。いつも遊んでくれるお兄さん、お姉さんとの関わりを求めて参加する子どもも多くなっており、中高生も積極的に参加しています。

歩きながらも、お互いに話しをしたり、ゲームをして楽しみながら疲れも見せずにどんどん歩いて進みます。休憩の際にはお弁当と一緒に食べたり、食べ終わった後は元気な子どもたちなので、すぐに遊んでいたでいます。

元気がよく先に歩きすぎて迷子になったりもしましたが、お兄さんお姉さんに手を引かれながら笑顔でゴールを目指しました。

また、今年のクリスマスには神戸真生塾へ訪問して下さり、手作りのお菓子やプレゼントに、手作り紙芝居やギターの生演奏も行つて下さいました。子どもたちもとても喜び楽しんでいました。また次の交流の機会を楽しみにしています。

(森木)

# こどもものつぶり

☆縄跳びで二重跳びをしているお姉ちゃんを一生懸命見ていたKちゃん、「どうやったの、上手に跳べるかな？羽が生えたらできるかな？」

(Kちゃん・五才)

☆サンタさんがどうやってみんながいい子にしているか見ているのか話していた時「わかった、遠い空から虫メガネで見てるんや」

(Hちゃん・六才)

☆ハーバーランドにお出かけする途中「お姉ちゃん、あそこに『コナン』いる！」Rちゃんが指差した方を見ると『コナン』がありました。

(Rちゃん・六才)

☆保育士と約束をする時にご機嫌に歌うMちゃん「指切りげんまんうそついたら針千本のーばす」

(Mちゃん・八才)

☆「目めくそいっばい」目くそと言いたかったんやね(笑)

(Kちゃん・七才)

☆褒めると「えへへ、照れるなあ」と素直に喜ぶRくん。可愛いですな。

(Rくん・七才)

☆興味津々を「きょうみしーしー」と話すAちゃん。その後「cレモンと一緒やな」と。本当に「きょうみしーしー」と覚えていたので慌てて訂正しました。

(Aちゃん・九才)

☆日曜日の十八時になると元気がよく「ちぢまるこちゃん！」と叫びます。何回練習しても「ちぢまるこちゃん」がなかなか言えませんが、

(Hちゃん・六才)

☆他の子がよくないことをしていたので、正義感いっばいのRちゃんは教えるにきてくれましたが、「スリッパでテープ使つて、紙ふんどつた！」と話していました。なかなか出来る技じゃないですね。

(Rちゃん・六才)

☆「俺天才やろ」と言うのでなぜか聞くと「天才やから」と鼻高々に話していました。英語とかけており誇らしげに話していました。

(Sくん・十才)





# 巣立ち行く子ども達から...

私は十八年間神戸真生塾で生活をしてきて、色々な事がありました。嬉しかった事や、楽しかった事の反面、辛かった事や悲しかった事もありました。十八年間の出来事は言葉では表せないほどです。

正直、施設にいる自分に対して、否定的な思いを持った事もありました。しかし、施設の子どもたちやお姉さん・お兄さんと過ごす事が当たり前で、本当の家族のような存在になり、私にとって大切な居場所となりました。

私はこの春、施設を退所し、将来の夢の為に進学します。これから不安や悩みもたくさんあると思いますが、目標に向かって頑張っていきたいです。

十八年間私を支えて下さったお姉さん・お兄さん、周りの方たちに本当に感謝しています。本当にありがとうございます。



(相木 萌)

二〇〇六年、ポアンカレ予想を証明したグリゴリー・ペレルマンはフィールズ賞の受賞を辞退した。彼は現在ロシア国内で隠遁生活を送っていると言われる。彼の趣味はキノコ狩りである。隠遁生活。キノコ狩り。羨ましいではないか。

私ははつきり言って、人と接するのが得意ではない。加えて受験生である私は常日頃から「たたみ二畳くらいの部屋に閉じ込めて勉強だけをさせてくれ」と思っていた。「精神と時の部屋」みたいだ。

でも私がいかに放り込まれたのは子どもたちと一緒に部屋で、最初はとても不便を感じた。静けさと孤独を望んでいるのに、与えられるのはにぎやかさと集団生活ばかりであった。

しかし、そこには確かにぬくもりがあった。真生塾を去るときに、私はそのぬくもりを名残惜しむことであろう。

私が俗世間から離れる日はまだ遠い。



(國弘 瑠利子)

私は中学校の春休みの時に神戸真生塾へ来ました。初めて来た時は、これから皆とうまく生活していけるかと心配と不安でいっぱいでした。実際、来てみるとさくら草の皆は自分のことを家族のように迎えてくれとても嬉しかったのを覚えています。

この三年間で様々な人と出会い、色々な経験をすることが出来ました。アルバイトを通して現実社会の厳しさや、人間関係の大切さを学ぶことが出来ました。また学校では多くの友人や先生方と出会い、仲間の大切さや勉強の楽しさを学ぶことも出来ました。学校生活の三年間は介護福祉の勉強をして、去年の八月に介護ヘルパー二級の資格を取得しました。今年の四月からは、明石市にある介護施設ハー

トケアに就職が決まりました。ヘルパー二級の資格を活かして頑張りたいと思います。

また、今年の三月末から一人暮らしが始まるのを考えると悲しい気持ちでいっぱいです。今までで学んだことをしっかりと活かして、四月から立派な社会人になれるように頑張りたいと思っています。

三年間私のことを支えてくれた皆様、本当にありがとうございます。

(仲松 福美)

僕は将来、児童養護施設の職員として働きたいです。

僕は十八年間神戸真生塾で育ちました。その間に、将来が不安になった時期や反抗期もありました。職員の人に対してひどい言葉を言ったこともあります。そんな時、職員は愛想を尽かすことなく真剣に関わってくれました。そして、自分がしてもらったことを、他の子にしてあげたいと思うようになりました。また、一緒に神戸真生塾で生活している年下の子どもが僕を見つけて笑顔で来てくれると、とても嬉しい気持ちになりました。年下の子が間違ったことをした時に、僕が注意したこともありましたが、最初は、ふてくされても時間が経つと理解してくれることもあります。子どもの成長を感じられるところも施設職員のやりがいだと感じます。そして、できれば今一緒にいる子ども達の成長を最後まで見たいという気持ちもあります。

僕は養護施設で育つという経験をしているので子ども達にとってより身近な存在となり、気持ちを理解できるのではないかと感じています。これまで関わってくれた人の恩返しの意味も込め神戸真生塾の職員として働くことが僕の最終目標です。

(南 智彦)

僕にとって神戸真生塾とは第二の家だと思っています。施設に帰ると必ず大人が「おかえり」と言ってくれる。これはごく普通の事だと感じる人が多いと思いますが、僕にとってそうではありません。

篠山の高校に進学し、下宿して三年が経ちましたが、家に帰った時「ただいま」と言わなくなりました。なぜならおかえりと迎えてくれる人がいないからです。だから施設に帰ってきた時に「帰ってきたんだ」と実感できました。

その他にも、施設のお姉さん・お兄さんには本当にお世話になったと思います。高校受験や大学受験など、僕の進路の事なのに自分の事のように動いてくれました。これが本当の『お・も・て・な・し』なのではないでしょうか。

神戸真生塾では色々な思い出があります。楽しかった事、嬉しかった事、嫌な事、理不尽だと思った事。今となっては良い思い出です。四月から宮崎県の大学生活が始まりますが「ただいま」とまた時々顔を出します。



(山口 祐希)



《乳児院 真生乳児院》

愛された記憶をつなぐ  
〜連続的なケアを目指して〜

主任保育士 松原留美子

週末になると、当院から児童養護施設「神戸真生塾」へ養護移行となった子どもたちが泊まりにやってきました。それは二年前程前に、法人内の児童養護施設へ措置変更となつて間もないRちゃん（4歳女児）が「乳児にお泊まりしたい：。」といった一言がきっかけで始まりました。毎週末とはいかず不定期ではありますが、乳児院で生活していた頃に担当していた職員の出勤日に合わせて計画しています。乳児院の職員は大きく成長した子どもたちが泊まりに来てくれることが嬉しく、とても楽しみにしています。

また、週末のお泊まりだけではなく施設の垣根を超えて、普段からお互い遊びに行き来する機会をもてるよう努めています。子どもたちからリクエストがあれば一緒におやつを食べたり入浴をしたり、その時々状況にあわせて柔軟に伝えられるよう職員間の連携も大切にしています。そこで、今回初めての試みとなった

のが11月23日の淡路島へのお泊まり保育です。メンバーは、乳児院で生活するIちゃん（4歳）とAちゃん（3歳）、そして児童養護に移行して2年目のKちゃん（5歳）です。

お出かけ中のKちゃんは常にAちゃんのことを気にかけて、AちゃんもKちゃんと同じようにしようと嬉しそうに後ろをついて回ります。みんなでお買い物へ行き、一緒にご飯を作つて食べ、たくさんお喋りして：帰りの車ではみんなぐっすり夢の中。巣立っていったKちゃんの成長を身近に感じ、とても充実した二日間を過ごすことができました。

Kちゃんだけでなく乳児院に遊びに来る子どもたちは、小さい頃の話をすると照れながらも「もっと赤ちゃんの時のおはなしして」と膝の上に座り、みんな甘えん坊に戻ります。まだまだ今後の課題はたくさんありますが、連続的なケアの一つとして、乳児院から児童養護施設へ措置変更した子どもたち

との関わりを大切にし、継続して成長を見守り続けることが、乳児院の職員として大切な役割であり、大きな喜びでもあります。

また、こうした取り組みは、子どもひとりひとりが抱える背景や経過に目を向け、その子が赤ちゃん時代（乳児院）に過ごした人との関係性や場所に対し、大人も一緒に大切にしていきたいと感じ支えてくれている児童養護施設職員の理解と協力の下で実現できているのだと感じています。

養護への措置変更のあり方は、その後の子どもの人生を大きく左右するほど大切な節目であります。私たち職員は、Hごろから児童養護施設と連携を深くもつことで、既に養護移行となつ

た子どもだけでなく、これから養護移行となる子どもにとっても不安を解消するものとなり得るよう「つながりある養育」を目指しています。

これからも、子どもたちの心の中に愛されて育つた記憶として残していけるよう、乳児院の職員も日々の関わり方を見つめ直しながら、子どもたちのよりよい幸せを願い、見守っていきたいと思います。

親子レストラン  
コラッコで  
食育支援



保護者の食育を支援しよう、当院では乳児院の献立にそつて管理栄養士の指導のもと、調理員と非



常勤保育士が対応しております。デイサービス・ショートステイ利用後の親子、さらさら保育園を利用している親子、法人内子ども家庭支援センターの様々なプログラムに参加された後の親子で、好評を得ております。（地域支援担当調理員 新見





# 《自立援助ホーム 子供の家》

## 自立援助ホームの近況について

垂水区に開所された「自立援助ホーム 子供の家」も、三月で3年目を迎えます。関係機関との連携や関わりも多岐に渡ってきています。

平成二五年度は、九名の入退所がありました。現在においての入所経緯は、神戸市子ども家庭センターを主軸としながらも、市外子ども家庭センター、女性家庭センター（シエルター）、市内外の養護施設、鑑別所、少年院などとなっています。

入所相談に至っては、弁護士や学校関係、病院、保護観察所、また子ども本人から相談のケースもあり、それぞれの件数はまだ多くはありませんが、少しずつホームの認識が広がってきているのを感じます。

そのような中、昨年一〇月三十一日には、初めて男女二緒にホームを使って「ハロウィンパーティー」を行いました。関係者の方にも来て頂き、子ども、職員共に思いの仮装をして、大いに盛り上がりました。日頃は、男女が顔を合わせる事はなく、日中はそれぞれにアルバイトや仕事をしている関係上、なかなか同じ時間に一同に会する、とい

う事が出来にくいのですが、この時ばかりは仕事が終わると早足で帰ってきた子どもたち。やはり楽しかったのか、その後も「クリスマス会もしたい！」との声が上がります。同じくホームを使って、全員参加での「クリスマスパーティー」も行いました。関係者の方がサンタの扮装で登場されたり、地域で活動されている沖縄系音楽のバンドが演奏して下さるなど、賑やかに楽しいひと時を過ごしました。

終わってからは「こんな楽しいクリスマスは初めてだった」と呟く一六歳女子…。「ああ、明日からまた仕事頑張ろう！」と両手を大きく伸ばしてにこやかな表情の一九歳女子…。

そんな子どもたちの姿を見ながら、関係機関を含めた皆様の暖かい理解があることへの感謝を忘れない事が大切だ、と思わせられました。現状では、三年近く経つ中で二十歳の誕生日を迎える「自立退所」の子どもたちが増えてきています。今後、退所児が増えていく中で、新たにアフターケアもしっかりとした枠組みで取り組んでいかなければいけない大切な業務のひとつです。

退所後も四苦八苦しながら、社会の一員として生きていく子どもたち。スムーズな「自立」に繋がる事は簡単ではありません。しかし、「何かあった時には頼っていいよ」その言葉を、今回の行事で色々な関係者の方々が子どもたちに掛けて下さいました。社会の厳しさ、冷たさだけに目を向け、叱咤激励するばかりでなく、暖かさや迷いも受け止められる安心感を同時に与えながら今後も支援を続けていきたいと思えます。

(有吉)



### 《ロータリー 子どもの家》

### 野外活動 フログラム

子ども家庭支援センターでは、地域の子育て家庭の相談から子どもの健全育成のためのプログラムまで約二十種のプログラムを展開しており、中でも野外活

動のプログラムの歴史は長く、一九九八年から始まり、現在一七年目を迎えています。

野外活動では、子どもたちが春の里山、夏的大海、秋の川、冬の雪山など四季折々の自然の中で五感を十分に用いて体感するプログラムを年間通じて実施し、子どもがもつ身体能力と感性により、「自然の一部としての人間」を実感してもらおうことを目的としています。さらに火をおこして料理ができる、危険から身を守る事ができる等の力を養い、自立した人間力・生きる力・ひいては自然を守る心を育てていきたいと考えています。プログラムを実施していると、たとえ1日でも子どもたちの急激な成長を目にすることがあります。初めて親元を離れてキャンプに参加し寝る時に涙が止まらなかった子どもも色々な活動を通して自信をもち、帰る頃には親も驚くほどたくましい顔になっていることも多々あります。このような自信は、子どもたちが今後の人生のなかで大きな糧となり、人としても豊かに育まれていくのではないかと思います。また近年では発達障害などの配慮を必要とする子どもへの参加も増えていますが、そのような子どもたちも同じように活動できるようにスタッフの専門性を高め、ボランティアの育成にも力

を入れていきます。さらにファミリーで参加するプログラムを増やすことで、保護者の横のつながりの強化、親子のコミュニケーションの増進、父親が活躍できる場の提供を行っています。そして、子どもがどのような活動を経験し、成長しているかを知っていたくために、子ども家庭支援センターロータリー子ども家の活動の様子はFacebookでも随時公開しています。

二〇一三年度も春キャンプから始まり、ファミリーキャンプや海遊び、木工デイキャンプ、焼き芋大会、クリスマスキャンプなど四季に合わせたプログラムを一月未現在で九回行い、のべ二七一名が参加しています。神戸ライフセービングクラブや近隣の大学生、成長した参加者がボランティアとしてのべ六二名が参加してくれたり、多くの方々の協力のなかで実施できており、ご協力下さった方に心より御礼申し上げます。(久山)





# 皆様のご意見、ご要望をお聴きしています。

## 神戸真生塾苦情処理委員会

- 苦情受付担当者 久山 啓 (子ども家庭支援センター  
ロータリー子どもの家 センター長)  
森本 みずき (真生きらきら保育園 主任保育士)
- 苦情解決責任者 富川 和彦 (児童養護施設 神戸真生塾 施設長)  
敷田 紀久子 (乳児院 真生乳児院 施設長)  
上杉 徹 (保育所 真生きらきら保育園 園長)
- 第三者委員 森光 規之 (当法人 監事)  
中村 悦子 (主任児童委員 中央区山手地区民生委員児童委員)
- 苦情受付件数 平成25年12月より平成26年2月末まで3件

ロータリー子どもの家は、児童福祉法に基づく児童家庭支援センターとして、神戸市から認可を受けています。二〇〇五年度の四月より、従来の活動とともに、子どもと家庭についての専門相談機関として、働いています。



毎日、午前9時〜午後6時、  
緊急のご相談は夜間もOKです。

子育てに  
困った時は  
先ず電話！

### 子育てホットライン(相談専用)

# TEL.078-341-6493

神戸真生塾子ども家庭支援センター  
(ロータリー子どもの家)

Homepage <http://www.rotary-kodomoie.org/>

### 《編集後記》

寒さ厳しい折ですが、神戸真生塾に大学合格通知・就職採用通知が届き、一足早い春の訪れを感じています。

今回も皆様のご支援の下、広報誌『愛』二七号をお届けする事ができます事を職員一同嬉しく思います。

本誌の五ページにも紹介しましたが、今年度は五人の子ども達が進学・就職で神戸真生塾からそれぞれの道へと巣立っていきます。

たくさんの方々を支えられ守られて来た子ども達にとって、たった一人で社会に出て行く不安は想像を絶するものがありますが、今までたくさんの方々から頂いた愛を糧に、自分の力で力強く自分の未来を切り拓いていってほしいと願っています。巣立っていく子ども達のことから、の人生が幸多いものであることを祈るばかりです。

最後になりましたが今年も一年間の広報誌を発刊するにあたってご協力いただいた皆様に感謝いたします。来年度もどうぞ広報誌『愛』を宜しくお願いたします。

(金岡)

